

第 32 回 全国国立大学生涯学習系センター研究協議会での開会挨拶

第 32 回全国国立大学生涯学習系センター研究協議会の開催にあたり、ひとことご挨拶を申し上げます。最近丸谷才一さんが、『あいさつは一仕事』という本を出されています。この本の教えに従い、短く、ユーモアをもって構成したいのですが、これはなかなかの大仕事でして、そうはいきませんがお許しください。

本年度この協議会が中断されることなく開催されますことを、和歌山大学の生涯学習教育研究センター(本年7月より地域連携・生涯学習センターと改称)を立ち上げ10年間センター長を務めた者として、また現在国立大学法人和歌山大学の運営において<大学と生涯学習>というコンセプトに大きな意味があると意識し、学長職を務める者として、大変嬉しく思っております。

また、今回は生涯学習系センターのない大学も含めまして多くの大学が、また教員だけでなく多くの事務職員層の方々が参加されておりますことは、大変意義深いことであると思っております。

さて、現在の国立大学の運営にとって<生涯学習>という言葉がキーワードであると申し上げました。和歌山大学での経営に即して申し上げます。

一つは<学生の生涯><人の生涯>を支援するという意味での大学の役割であります。学生の支援を<生涯>という言葉で考えますときにも、また2つの<生涯>の意味があることに直面いたします。

多くの学生は18歳で入学するわけですが、18歳までの育ちにおいて多くの課題を背負ってきております。大学における教育、学生支援プログラムは、彼ら彼女らの大学入学までの18年間の育ちの洞察なしには機能しません。これについては多くのエピソードがありますが、時間がありませんので、詳しくはふれませんが、ご参加の大学教職員の皆さんの日常においてもご経験があると思えます。和歌山大学で申し上げますと、これらのエピソードについて役員会でも毎回議論し学習し、思案しております。今申し上げましたことは学生の過去の時間としての<生涯>であります。

私どもが学生支援を考えますと、彼らの人生の過去の時間を考えるだけでは済みません。当然彼らの未来の<生涯>をも視野に入れなければなりません。就職困難な今であっても3年間で30~40%の就職者が離職する、会社を辞めるということでもあります。キャリア教育、キャリア支援という言葉が飛び交い、学士力形成、社会人基礎力、就業力、大学教育の質保証等々と言われておりますが、ではこれらの言葉で表現される一つひとつのテーマに取り組めば、学生の生涯の人生に幸福があると思えるでしょうか。そう簡単ではないように思われます。

だとすれば、卒業後の挫折、転換等を視野に入れた<生涯の支援>もまた大学の課題であると思われまます。

以上がまず一つ目の<大学と生涯学習>のテーマであります。

二つ目は、<大学と地域生涯学習>というテーマであります。地域の持続的発展を担う人材の養成にコミットすることは、地方国立大学の最重要課題であります。この課題の達成なくして、日本社会

は地方国立大学の存在を承認しないであろうと、我田引水が過ぎるかもしれませんが、私は思っております。しかし多くの大学関係者にとっては、これほどまでの認識はないと思われます。

和歌山大学では、本学のセンターの経験をいかして〈大学における生涯学習〉を地域創造支援として考え、この課題にチャレンジしようとしております。

この際私どもが強調しておりますことは、大学(研究者、職員)が、地域の苦悩を深く認識し、その苦渋を共有するという思想、姿勢の確立であります。できあいの研究成果で、困難に直面する住民・地域をエンパワメントすることはできないでしょう。

以上二つの点で〈大学と生涯学習〉の重要性を申し上げました。このテーマにおける実践と研究は、大学実践論、経営論における新しい領域であります。日本の生涯学習政策、高等教育政策の新しい領域でもあります。

今回の協議会には、このセンター研究協議会後に文部科学省・和歌山大学共催の熟議「地域における大学の役割～大学に期待すること～」が開催されることもあり、文部科学省から坂東生涯学習政策局長、藤野生涯学習推進課長以下 16 名の方にご参加いただき、大学における生涯学習の課題のために議論をともにしていただけることになっており、嬉しい限りです。ここに高等教育局も同席、同伴していただけるならば、いっそうの前進であります。またその域には文部科学省も達していないと思われます。

皆様の実践、研究が、高等教育局を動かし、またそれぞれの大学の経営、学長を動かすことを願っております。

今、次年度予算編成過程を含め高等教育政策は深刻な局面にあります。それぞれの大学も大変かと思えます。鈴木寛文部科学副大臣は、学長会議でいつも「高等教育政策の充実のためにも戦おう」と、私ども学長を激励してくれております。先日は、磯田高等教育局長も予算の編成において、最終決定の瞬間まで高等教育局は戦うと言っておられました。これほどまでに「戦おう」と叫ぶ時代はなかったのではないのでしょうか。

文部科学省の決意は私どもにとっても心強いものでありますが、われわれ現場の当事者といたしましては、大学の存在意義・価値について広く国民の承認を勝ち得る戦いが重要だと思われま

す。その意味で、生涯学習という国民との接点の最前線におられます皆様方の戦いが、この戦いの帰趨を決すると言ってもいいかもしれません。

今日明日が実りある時間になりますことを切にお願いいたしまして、丸谷流にはいきませんでした。これで〈一仕事〉とさせていただきます。ありがとうございました。

国立大学法人和歌山大学
学長 山本健慈

(2010年10月22日～23日開催 於：ホテルグランヴィア和歌山)